

## 課題5 . 子どもの保健と医療の連携活動

### センター内の連携ならびにセンター外の連携

活動項目	活動項目別の実績(概要)
実 施 活 動	<p><b>センター内の連携活動</b></p> <p>1. 入院患者（家族）に対する患者満足度調査の実施            平成 17 年度内で、退院が決まった患者及び家族に対して調査を実施した（回収数 1,017 件）。当センターへの入院・退院に関する全体の印象では、「すばらしい、とてもよい、よい」との回答が 97.4%と高率であった。自由記載内容の分類では、良かった点は、スタッフの対応や療養環境（子どもの視点にたった人的・物的な環境）が多く、悪かった点では付き添う家族の不便さに関するものが多くあげられていた。</p> <p>2. 退院に向けての地域への紹介            退院をする患者で在宅医療・療養等で地域の関係機関に依頼が必要なケースについて、医療部門と連携し支援をしている。平成 17 年度は各病棟及び外来から 56 件の依頼があり、在宅医療・看護の導入などのコーディネートや育児不安が強い事例への支援、地域での受け入れ体制の整備などを行った。また、地域に依頼したケースについては、必要に応じ外来受診時などに相談にのり、地域の関係機関や医療部門との調整役も担っている。</p> <p>3. アチェメック子育てスクール            家族の力だけでは子どもを育てることが困難な家族が、不適切な養育に陥らないよう、未然にその持てる力をエンパワーしていくために、平成 17 年 4 月からアチェメック子育てスクールを開始した。担当看護師が看護アセスメントする中で、育児不安が強い人、母親からも具体的な育児の心配などの相談があった人等を対象に、医療・保健部門の関係スタッフと母親と相談し支援プログラムを作成、平成 17 年度は 5 事例実施した。</p> <p><b>センター外の連携活動</b></p> <p>4. 市町村保健師研修「軽度発達障害児の地域支援について」            平成 16 年度、知多半島地域を対象に新規で企画し好評であった「軽度発達障害児の地域支援について」をテーマとした研修を、今年度は対象を県内全市町村に広げ実施した。研修内容は講義と心療科外来見学実習で、市町保健師 16 名が参加した。</p> <p>5. 保育リーダー研修            保健室の調整機能と総合診療部の総合的な療育機能を活用し、気になる子を含む、障害を持つ子どもたちの理解と対応の基本的な知識と技術について、地域の一般の保育園等で中心的な役割を担う保育士に対して学習する機会を提供し、必要な知識・技術を習得してもらうことを目的に前年度から実施。今年度は 38 名の参加があった。</p> <p>6. 訪問看護ステーション研修            当センターを退院し在宅で人工腹膜透析をするケースへの支援体制を整備する目的で、訪問看護ステーションの看護師等を対象に、腎疾患をもつ小児看護スキルアップを図るための研修を実施した。内容は、講義と実技（透析の方法）で、愛知県内の訪問看護ステーション（名古屋市を除く）から 41 名が参加した。</p>

## 1. 入院患者（家族）に対する患者満足度調査の実施（平成17年度実施結果）

目的：センター医療部門の利用者である患者及び家族からの意見をモニターすることにより、質の高い医療の提供や子どもと家族を取り巻く環境（人的・物的・空間的）に配慮したこどもと家族のための療養環境づくり資する。

No.	質問タイトル	素晴らしい	とてもよい	よい	わるい	とんでもない	利用していない	未記入	計
1	ご入院	266	425	306	14	1	0	5	1017
		26.2%	41.8%	30.1%	1.4%	0.1%	0.0%	0.5%	100.0%
2	看護ケア	427	400	178	7	0	1	4	1017
		42.0%	39.3%	17.5%	0.7%	0.0%	0.1%	0.4%	100.0%
3	医療ケア	471	384	156	1	0	0	5	1017
		46.3%	37.8%	15.3%	0.1%	0.0%	0.0%	0.5%	100.0%
4	ご家族中心の医療	358	376	257	4	0	12	10	1017
		35.2%	37.0%	25.3%	0.4%	0.0%	1.2%	1.0%	100.0%
5	案内	279	386	318	22	0	9	3	1017
		27.4%	38.0%	31.3%	2.2%	0.0%	0.9%	0.3%	100.0%
6	お子さん(患者様)の快適性	364	385	230	17	0	16	5	1017
		35.8%	37.9%	22.6%	1.7%	0.0%	1.6%	0.5%	100.0%
7	ご家族の快適性	208	331	410	46	3	12	7	1017
		20.5%	32.5%	40.3%	4.5%	0.3%	1.2%	0.7%	100.0%
8	ご退院	239	355	289	14	2	1	117	1017
		23.5%	34.9%	28.4%	1.4%	0.2%	0.1%	11.5%	100.0%
9	外来診療	138	302	409	74	2	43	49	1017
		13.6%	29.7%	40.2%	7.3%	0.2%	4.2%	4.8%	100.0%
10	救急診療	55	60	76	6	0	608	212	1017
		5.4%	5.9%	7.5%	0.6%	0.0%	59.8%	20.8%	100.0%
11	日帰り手術 日帰り検査	50	82	100	6	1	553	225	1017
		4.9%	8.1%	9.8%	0.6%	0.1%	54.4%	22.1%	100.0%
12	全体のご印象	342	452	197	8	1	0	17	1017
		33.6%	44.4%	19.4%	0.8%	0.1%	0.0%	1.7%	100.0%
	No.1～12	3,197	3,938	2,926	219	10	1,255	659	12,204
		26.2%	32.3%	24.0%	1.8%	0.1%	10.3%	5.4%	100.0%

  

	有	無	未記入	計
13 退院後の心配事	227	605	185	1017
	22.3%	59.5%	18.2%	100.0%

対象：平成17年4月から平成18年3月までの退院が決まった患者及び家族

方法：入院手続き時に調査票を配布し協力依頼、退院時に医事において回収。回収数 1,017 件。

（調査票： 参考）

良かった点、悪かった点について、記載された内容を以下に分類した。

### 【良かった点】

施設・設備	療養環境	医療	看護	スタッフの対応	面会	システム	付き添い家族	食事	売店 レストラン	その他	計
34	210	83	54	278	14	6	10	9	1	1	700
4.9%	30.0%	11.9%	7.7%	39.7%	2.0%	0.9%	1.4%	1.3%	0.1%	0.1%	100.0%

### 【悪かった点】

施設・設備	療養環境	医療	看護	スタッフの対応	面会	システム	付き添い家族	食事	売店 レストラン	その他	計
88	31	0	31	46	3	45	109	28	27	9	417
21.1%	7.4%	0.0%	7.4%	11.0%	0.7%	10.8%	26.1%	6.7%	6.5%	2.2%	100.0%

質問項目

No	質問タイトル	質問の内容
1	ご入院	ご希望通りご入院いただけましたか？ご入院までの待機期間、ご入院日などはご希望に即していましたか。入院手続きの説明はよく分かりましたか。
2	看護ケア	看護スタッフは、親切で、責任感がありましたか。あなたのお子さん（または患者様であるあなた）のお話を十分に伺いましたか。説明は分かりやすかったですか。安心できましたか。
3	医療ケア	医師は、親切で、責任感がありましたか。あなたのお子さん（または患者様であるあなた）のお話を十分に伺いましたか。説明は分かりやすかったですか。安心できましたか。
4	ご家族中心の医療	検査や治療方法を決める際に、ご家族のご意見は十分に配慮されましたか。スタッフは十分に説明しましたか。
5	案内	センターのスタッフやボランティアは話しやすかったですか。説明はよくわかりましたか。院内の案内表示は分かりやすいですか。
6	お子さん（患者様）の快適さ	センターのスタッフやボランティアは、病棟や外来でお子さんが快適に過ごせるよう配慮していましたか。病室やプレイルームなどの施設やセンターの環境は快適でしたか。
7	ご家族の快適さ	センターのスタッフやボランティアは、病棟や外来でご家族が快適に過ごせるよう配慮していましたか。面会中は快適に過ごせましたか。待合いなどの施設は便利にご利用頂けましたか。
8	ご退院	ご希望通りご退院いただけましたか？入院期間、ご退院日はご都合の良い日程でしたか。退院手続きの説明はよく分かりましたか。
9	外来診療	ご予約にご不便はありませんでしたか。待ち時間はどうでしたか。
10	救急診療	患者様のご容態によく配慮されていましたが、待ち時間はどうでしたか。
11	日帰り手術・日帰り検査	日帰りの手術日や検査日は、ご都合の良い日程でしたか。手続きの説明はよく分かりましたか。手続きは簡単でしたか。
12	全体のご印象	当センター全体のケアやサービスの質はいかがでしたか。
15	良かった点。	当センターをご利用いただいて良かったと思われる点を自由にご記入下さい。
16	悪かった点。	当センターをご利用いただいてご不満な点、問題点、おかしいと思われる点をご遠慮なくご記入下さい。
17	改善へのご提案。	センターがどのように変わると問題が解決するでしょうか。ぜひご提案をいただきたいと存じます。

## 2. 退院に向けての地域への紹介

保健部門では、退院する患者さんで在宅医療や在宅療養等で地域の関係機関に依頼が必要なケースについて、医療と連携をとりながら支援をしている。

平成15年8月1日に保健室の保健師と医療部門の看護部長及び外来・病棟師長が出席し、連携についての打ち合わせ会を開催した。その際、医療と保健部門が連携を深めていく必要性についてお互いに確認をした。

平成15年10月から、退院するケースについて各病棟から、連絡票により（但し、急な場合は口頭で連絡あり。）保健部門への連絡があり、保健部門として地域を見据えた支援が始まった。

平成16年度は各病棟から24事例の依頼があった。内容は、在宅医療や育児不安が強い事例が多かった。平成17年度は、56事例と昨年度に比べ増えており、医療部門との連携も深められてきたと思われる。また地域への依頼は、保健機関、訪問看護ステーション、療育施設、学校等と多機関であり、必要時には、退院に向けての連絡会議を開催して連携を行なっている。退院後は、退院サマリーに併せて返信票も添付するようにしたため、地域との連絡が取り易くなった。

保健室をとおして、地域に依頼したケースについては、退院後も母が保健室に来室したり、電話での相談があり、その都度必要に応じて、相談にのったり、医療部門との調整役も担っている。

（第4章資料編 医療（病棟）から地域への連携実績を参照）

## 3. アチェメック子育てスクール

### 【はじめに】

近年、核家族化が進み家族機能が低下している家庭が増えている中、子育ての負担が母親に大きくかかってきている現状がみられる。かつてのように地域の中で、祖父母や隣人などに助けてもらったり、あるいは子育てを代わってもらったりすることができず、子育ては不安で困難な仕事になってしまっている母親もいる。また結婚して母親になる過程で子育ての知識や技術を自然に身につける機会もなく、子どもを抱くのもわが子が初めてという母親が増えているとも感じている。

そこで、平成17年4月から、当センターでは、保健部門と各病棟・外来の医療部門との連携により、子育て支援を目的に、「アチェメック子育てスクール」（以下、子育てスクール）を開始した。子育てスクールでは、入院または通院中の子育てに困難を感じている家族に対して、不適切な養育に陥らないよう、未然に、その持てる力をエンパワーし、地域で暮らしてゆくのに必要な社会資源を紹介すると共に、地域の関係機関に円滑に繋いでいる。

### 【実施した目的・内容】

対象者は、担当看護師が看護アセスメントする中で、育児不安が強い人、母親からも具体的な育児の心配などの相談があった人に、子育てスクールを紹介している。

病棟内でのカンファレンスや親の希望から対象者を決定し、実際に育児を行う母親と相談しながら、支援内容や実施期間、その子どもの退院後をイメージした、入院中の衣食住を中心とした簡単なプログラム（離乳食・お風呂など）を検討した。これを元に、両親を含めて、病棟担当看護師・病棟師長、保健室医師・保健師等が話し合い、支援プログラムを作成・実施した。

### 【実施した結果・考察】

対象は5事例で、子育てスクール実施期間は4日～20日。対象児の年齢は5ヶ月から1歳3ヶ月であった。

各母親の育児不安の内容に合わせ、かつ退院後の家庭生活を念頭に置いた日課表を作成することで、自宅での生活をよりイメージすることができた。母親の育児不安となっていた内容を数日間繰り返して実施したり、時には、父親も一緒に参加したりすることで、退院後の子育てをイメージすることができた。児の疾患が落ち着いた時期に、余裕を持って子育てスクールを行ったことも、母親や家族にとってよかった。また、母親のすぐそばに、いつでも相談に乗ってくれる人（病棟スタッフ）がおり、不安になった時にすぐ具体的なアドバイスをしてくれるため、母の安心と自信につながったと思う。具体例としては、今まで一度も外出できなかった母親が、散歩の日課を通して児と出かける自信がついた。一人で入浴させることにも自信がもて、帰りの遅い父を待たずとも、安心して一人で入浴させられるようになった。これらを通して母親の笑顔も見られるようになった。児が、日課表どおりにいなくても、母が落ち着いて対応出来るようになり、児もよく食べ、よく眠るようになったので、育児が楽になったと話してくれた両親もいた。子育てスクールに参加することで、父親の協力が得られるきっかけとなったケースもあった。

### 【まとめ】

今回の子育てスクールは、初めての試みであったが、医療部門と保健部門がある当センターだからできたのではなく、日ごろから家族を十分アセスメントし、患者・家族の入院生活だけを見るのではなく、いずれは、地域で生活してゆくという視点から育児を見てゆくように医療者側が意識してゆくことで、家族の不安、思いを理解し、どの医療機関でも工夫し、展開してゆけるものと考えている。

## 4.. 市町村保健師研修「軽度発達障害児の地域支援について」

研修名	平成 17 年度市町村保健師研修 軽度発達障害児の地域支援について
【目的】	医療の実際を知ることにより、医療と保健の連携を強化し、地域でのケース支援に役立てる。
【日時・内容】	(1) 平成 17 年 7 月 7 日 (木) 講義「軽度発達障害児の理解と支援」心療科医師浅井朋子 (2) 心療科外来見学研修 *1人1回出席 平成 17 年 7/8 (金), 7/15 (金), 7/22 (金), 7/29 (金), 8/5 (金), 8/12 (金), 8/19 (金), 8/26 (金)
【参加者】	市町村保健師 16 人 (その他講義のみ参加 保健所保健師 2 人)

【研修生によるアンケート】

学んだこと、参考になったこと
子どもへの支援だけでなく、母親がどう対処したらいいのかという具体的な母親への支援がとても大切。障害の診断過程。
両親の気持ちを受け止めながら、前向きに考えていけるよう具体的な助言がされていた。病院でできることできないことが明確に話されていた。
児の行動について、「どうしてそうなるのか」をきちんと説明してあげることで母親の不安への軽減につながると感じた。
愛着形成される年齢の家庭環境が、小学生になっても精神的な安定に影響を及ぼしている。その時期の家庭環境を振り返り分析することの必要性を感じた。
愛着形成は母・子どもにもそれを阻害してしまう因子をもつことを実際に見ることができた。
今回の小学生の受診で乳幼児期の情報がとても大切であると改めて感じた。実際の診察場面をみることで受診する親子の気持ちを考えるきっかけになった。
子どもへの対応等その子に応じた集団生活での対応をどう示せばよいか。両親の心配や不安を聞き、地域での支援を考えねばと思った。
児の乳幼児期からの生育歴を具体的に聞いているのに驚いた。現在のことだけでなく、将来のことまで考えて話されており、児を全体から捉えていくことが大切だと感じた。
妊娠期から乳幼児期の情報を上手に聞き取られていて参考になった。小学生中学生になった子どもたちが抱えている問題、親の問題意識を知ることができた。
今後の地域活動でいかせること
病気だからではなく「母が悩んでいるから対処と一緒に考える」、母と一緒に考える姿勢を大切にしたい。
子どもだけに目を向けるのではなく、母親の思いを十分に聞き、母親へのフォローもしていきたい。
地域での支援、医療機関の役割。親の会の情報提供、保健師の相談等相談機関へつなげること。地域療育システムの見直し。
受診し、診察がどのように進められていくのか、また、保護者に受診のメリットを伝えることができる。
健診や相談時に児の行動を聞き取るだけでなく、きちんとその意味を伝え対応を考えていくための根拠を知ることができた。
健診で出会うちょっと気になる子について、保護者に成育歴等を聞くときの参考になった。健診や相談を受けるときにいかせる。
受診や療育につなげるとき、その子がより理解できるよう、よりその子の力をのばすためにと母親に伝えていくことがよいとあらためて分かった。
どんな風に子どもと関わってあげると母子ともにわかりよいのかということ、外来受診でしっかり伝えてもらえる…ことを母達に伝えることができる。
対応の仕方や、受診場面で医師が話された内容がわかりやすく、今後お母さんたちに話すときに参考にし実際に取り入れていきたい。
受診する予定の方に診察がどのように行われているのかを伝えることで、多少でも不安な気持ちを軽減できると思う。
保健センターでは一番早い時期に関わるので、早めにフォローできる体制を今後検討していきたい。学校との関わりが必要、連携できる体制づくりを考えていきたい。
健診での早期発見と保育園・小学校などとの連携。病院での診断がついても実際に生活するのは地域である。連携とその子を支える人たちのフォローが必要だと感じた。
母がいろいろな思いを抱えて受診していることが分かり、それを踏まえて私たちはその間に入ったり手助けできるとよいと思った。健診の重要性を再認識したので、しっかりした目をもち行うこと、フォローをしっかり行っていきたい。また関係機関との連携を密に行っていきたい。
成育歴などから今やっていること(健診後のフォロー等)を確実に今後も実施していくことが大切だと感じた。また、学校等との連携も必要だとあらためて思った。
地域活動では親に児の特徴を理解してもらい、子どもに関わってもらおうか、親自身のサポートの必要性を感じた。また、保育園や学校との連携を持ち、個のサポートにあたるように今後心がけていきたい。
診断することにより、周囲からの本児や母親への理解が得られ、本人の自己評価を低くしたり、母親が責められたりしないことへつながる事が大切だと思った。
地域においても周囲の理解へつながるよう支援の必要を再認識した。

## 5. 保育リーダー研修

### 1 保育リーダー研修の概要

#### (1) 企画の趣旨

障害児保育の充実により、多くの障害を持つ子どもが保育園で生活するようになり、それなりの成果をあげている。しかし、保育現場サイドから見ると、気になる子を含む、障害を持つ子どもたちをどのように理解し、どのように保育すればよいかについての系統的な理論や技術が十分に提供されているわけではない。そのため、子どもを直接担当する先生方は、高い情熱と意欲を支えに、子どもたちの問題行動に試行錯誤と悪戦苦闘の連続の日々である。

保育リーダー研修においては、小児保健医療総合センター保健室の調整機能と総合診療部の総合的な療育機能を活用し、気になる子を含む、障害を持つ子どもたちの理解と対応の、基本的な知識と技術について、学習する機会を提供することにより、地域で保育を進めていく上で、中核的な役割を担う保育士を養成することを目的とする。

#### (2) 研修の対象者

愛知県内の市町村における保育所等において経度発達障害児や気になる子を健常児と共に保育する職員のうち、市町村等において推薦された保育士等 38名

#### (3) 研修会の方法

5回の研修会を実施した。初回については、講義及び継続観察の進め方の説明、参加者を6グループに分けグループワークを実施した。

第二回以後は、各回テーマに設定し全体会、グループワークを行うという形態で進めた。

参加者全員が自分の勤務する保育所で特定の保育・観察対象児を決め、本研修会で提案する「あいち小児センター方法」による集中的・継続的関与観察を実施した。

観察対象事例については、研修会での事例検討に加えて、適宜、メール・電話・ファックスなどを利用した個別のカンファレンスを行った。

#### (4) 研修の日程とテーマ

共通テーマ「軽度発達障害児の理解と保育」

第一回 平成17年6月7日(火) 参加者 38名

基調講演「広汎性発達障害」

講師

心療科 医師 東 誠

座長

総合診療部長 山崎 嘉久

オリエンテーション(継続観察の進め方)

臨床心理士 大河内 修

第二回 平成17年7月26日(火) 参加者 35名

ねらい「子どもの状態概要から観察場面・目標・援助を決めよう」

全体会

事例提供

北新田保育園 武田 直子

司会・助言

臨床心理士 大河内 修

グループワーク ファシリテーター

医師 山崎 嘉久

ファシリテーター

臨床心理士 大河内 修

ファシリテーター

作業療法士 田辺 祐子

ファシリテーター

臨床心理士 河邊 眞千子

ファシリテーター

保健師 青山 亜由美

ファシリテーター 作業療法士 佃 隆二

**第三回** 平成17年9月27日(火) 参加者 36名

ねらい「能力を育てる援助・・・日々の観察記録の利用」

全体会	事例提供	北新田保育園	武田 直子
	司会・助言	臨床心理士	大河内 修
グループワーク	ファシリテーター	医師	山崎 嘉久
	ファシリテーター	臨床心理士	大河内 修
	ファシリテーター	作業療法士	田辺 祐子
	ファシリテーター	臨床心理士	河邊 眞千子
	ファシリテーター	保健師	青山 亜由美
	ファシリテーター	作業療法士	佃 隆二

**第四回** 平成17年11月15日(火) 参加者 37名

ねらい「困った行動への対応方法発見シートの利用」

全体会	事例提供	北新田保育園	武田 直子
	司会・助言	臨床心理士	大河内 修
グループワーク	ファシリテーター	医師	山崎 嘉久
	ファシリテーター	臨床心理士	大河内 修
	ファシリテーター	作業療法士	田辺 祐子
	ファシリテーター	臨床心理士	河邊 眞千子
	ファシリテーター	保健師	青山 亜由美
	ファシリテーター	作業療法士	佃 隆二

**第五回** 平成18年1月17日(火) 参加者 36名

ねらい「これまでの取り組みをまとめる」

全体会	事例提供	北新田保育園	武田 直子
	司会・助言	臨床心理士	大河内 修
グループワーク	ファシリテーター	医師	山崎 嘉久
	ファシリテーター	臨床心理士	大河内 修
	ファシリテーター	作業療法士	田辺 祐子
	ファシリテーター	臨床心理士	河邊 眞千子
	ファシリテーター	保健師	青山 亜由美
	ファシリテーター	作業療法士	佃 隆二

(5) 研修会場

あいち小児保健医療総合センター 地下 大会議室



平成17年度保育リーダー研修参加者の所属施設名  
 (市町名、所属施設名は、H17年5月時点のもの)

市町	所属施設
一宮市	一色保育園
半田市	高根保育園
安城市	みその保育園
西尾市	米津保育園
蒲郡市	南部保育園
犬山市	橋爪保育園
常滑市	鬼崎南保育園
	千代ヶ丘学園
東海市	三ツ池保育園
	渡内保育園
	明倫保育園
大府市	共長保育園
	荒池保育園
知多市	新知保育園
	岡田保育園
知立市	上重原保育園
高浜市	高浜南部保育園
	高浜幼稚園
豊明市	沓掛保育園
日進市	北新田保育園
愛西市	社会福祉法人 西川端保育園
東郷町	中部保育園
	諸輪保育園
	和合保育園
西枇杷島町	西枇杷島保育所
春日町	第一保育園
清洲町	新清洲保育園
新川町	新川第六保育園
大口町	北保育園
阿久比町	北原保育園
東浦町	石浜保育園
南知多町	かるも保育所
武豊町	竜宮保育園
三好町	なかよし保育園
御津町	御津北部保育園
私立幼稚園連盟	いとう幼稚園
私立幼稚園連盟	西尾中央幼稚園
私立幼稚園連盟	堅磐信誠幼稚園

## 5.訪問看護ステーション研修

【目的】当センターでは、退院して在宅での人工腹膜透析をするケースがでてきているが、「小児の経験が少ない等」の理由で受け入れてくれる訪問看護ステーションが少ないのが現状である。そのため患児が在宅で生活できるように訪問看護ステーション（名古屋市を除く）に勤務する看護師等を対象に腎疾患を持つ小児看護のスキルアップ及び受け入れ態勢への充実を図れることを目的に研修会を開催する。

### 【日時、内容、参加人員】

(1) 7月3日(日) 9:50 ~ 16:00 41人

講義： 腎臓の働き 末期腎不全の病態生理 利点と欠点 透析の種類(CAPD、APD) 透析の種類と選択 合併症 緊急時の対処方法 器材管理

講師： ~ あいち小児保健医療総合センター 上村内科部長 講師： ~ 業者

(2) 7月9日(土) 7月10日(日) 7月30日(土) 9:30 ~ 11:30 各10人 30人受講【29事業所】

講義： 入浴、カテーテルケア 体重、血圧管理 食事管理 社会生活(学校、旅行) 子ども、家族のメンタルサポート

講師： ~ あいち小児保健医療総合センター看護師・ 専門看護師

### 【アンケート評価】

・属性：訪問看護師の経験は、4~10年 53.7%で1~3年 14人 34.1%11年以上 5人 12.2%であった。現在の立場は、正規職員 22人 53.7%責任者 11人 26.8%の受講者であった。研修参加動機については、82.9%知識のためと今後のため(重複回答) 41人中 19人 46.3%であった。

### 自由記載

・子どもの訪問看護経験なしが、27人 65.9% しかし14人 34.1%が経験ありであった。ありの回答の中で吸引・人工呼吸器・重度心身障害児・在宅酸素・腹膜透析の順で経験があった。  
・新しい知識は、常に必要と考え勉強はつづけるようつとめる。当ステーションでも小児の依頼があればやってゆきたい。  
・訪問時の観察ポイントも説明していただきわかりやすかった。CAPDについての知識がなく訪問の依頼があったら不安があったが、講義を聞いてとても分かり安心した。  
・本日参加できなかつた他スタッフにもぜひ受けて欲しいと思いました。年に1回と言わずできるならもう少し頻回に開催してもらえると嬉しいです。受け入れ後の協力もあるとのこと安心しました。  
・腹膜透析に関してのケアについて、子どもと家族のメンタルサポートについて不安があったが、今回の研修によりやや自信がつけました。

### 【まとめ】

・今年度新規事業で医療部門と保健部門との連携で企画し実施したところ小児の訪問看護を行なっているところが少なく、ケースがあれば実施したいという意見が多かった。また小児対象の研修がないため関心も高かった。  
・当センターの退院患者に受講した訪問看護ステーションを繋げたケースが1例あった。  
・次年度も実施予定であるが、受講希望者が多いため実技の方法の検討やニーズが高いため対象を県内の訪問看護ステーション(名古屋市も含む)に拡大予定である。  
・次年度は、今年度の内容に「地域」との連携についての事例紹介を入れていく予定である。

